

## 【解説】谷地遺跡の発掘調査と蔵王山麓の縄文文化

### 1. かけがえのない遺跡を未来へ

**遺跡とは何か** 私たちが生活する地面の下には、過去の人間が暮らした家の跡や、そこで使われた土器や石器などの道具が埋もれていることがあります。こうした場所を「遺跡」と呼んでいます。遺跡には集落や墳墓、城館、窯跡など様々な種類がありますが、ひとこと言えば「人間の活動した痕跡が残されている場所」であり、文字史料からは知ることのできない人間の様々な歴史的な営みを記憶している「文化遺産」です。



果樹園の下から姿を現した縄文時代の集落跡

**遺跡から何が分かるか** 日本列島には約 46 万か所の遺跡が知られており、未発見のものを含めるとさらに膨大な数になるでしょう。蔵王町では約 200 か所が知られています。このように数多くの遺跡が残されていますが、その時代や内容は実に多様です。日本列島の変化に富んだ地形や豊かな自然環境に応じて、それぞれの地域の人々の暮らし方があり、それが時代によっても変化したからです。遺跡を調べることで、それが残された当時のその地域の人々の暮らしを知ることができます。私たちの暮らす地域にはどんな歴史があったのか、当時はどのような社会で、ここに暮らした人々は何を思い、何を大切にしていたのか。それを教えてくれるのが遺跡であり、ひとつひとつが異なる歴史的価値を秘めた唯一無二の文化遺産なのです。

**発掘調査と遺跡保存** さて、その遺跡の残された時代やどのような活動が行なわれたかを知るには、「考古学」の手法によって発掘調査をする必要があります。ところが困ったことには、たとえ調査であっても一度掘り返した遺跡は元に戻すことができないのです。つまり、同じ実験を何度も繰り返すことで再現性を確認する理化学の実験と違い、遺跡の発掘はやり直しができない一回限りの実験です。加えて遺跡から様々な情報を引き出す調査技術も日々進歩しているので、将来の精密な調査に備えて、でき得る限り多くの遺跡を現状のまま保存しておくことが望ましいと言えます。

### 2. 遺跡を記録に残すための発掘調査

**文化財保護法と遺跡** 文化財を「国民共有の財産」と位置付けて保護の対象とした文化財保護法では、大切な遺跡を保存し将来の世代へ守り伝えていくために、未発見のものを含めたすべての遺跡を保護の対象としています。土地に関する日本の法制度の中で、未発見のものをあらかじめ対象に含めるのは極めて異例で、これによって土木工事中に偶然発見される遺跡などについても保護されることになっています。これは、調査をしなければその内容や重要性が分からないという遺跡特有の性質への最大限の配慮と言えます。また、現代の私たちの暮らしのために必要な開発などによってやむを得ず遺跡が影響を受ける場合には、少なくとも事前に発掘調査をして、その記録を出土品とともに保存することとしています。

**谷地遺跡の記録保存事業** 谷地遺跡は、青麻山を間近に望む松川沿いの台地の上に残された縄文時代の人々の活動痕跡で、町内では比較的早くからその存在が知られていた遺跡のひとつです。明治 37 年には佐藤傳蔵という研究者によって町内の鍛冶沢遺跡や柴田町の槻木貝塚などとともに「東京人類學會雑誌」に紹介されました。その後、文化財保護法の規定に基づいて「宮城県遺跡台帳」に登録され、「遺跡地図」と「遺跡地名表」

によって周知が図られてきました。周知の遺跡内で工事などを行なう場合は事前の届け出を求め、保護に万全を期する仕組みとなっています。

今回の発掘調査は、老朽化した消防庁舎の移転新設用地として周知の遺跡である谷地遺跡の一角を造成する工事に先立って実施したものです。関係機関による事前の協議では遺跡との関わりを避けることが検討されましたが、事業の必要性・緊急性が高く用地の変更も難しいことから、工事で影響を受ける範囲を対象に緊急発掘調査を実施して遺跡の「記録保存」を図ることになりました。現状保存の次善の策として、竪穴住居跡などの遺構の特徴と、縄文土器などの遺物の出土位置、これらの埋没過程などを詳しく調べ、図面や写真に記録し、出土した遺物とともに保存することで、工事で破壊された遺跡がどのようなものであったかを将来にわたって知ることができるようにしておくのです。

**発掘調査と整理・報告書作成** 近隣住民の皆さんや関係各位の理解と協力を得ながら進めた発掘調査には、当初の予定を超える14か月間を要しました。調査が進むにつれて大量の縄文土器や土偶、ヒスイのペンダントなどが出土し、谷地遺跡が縄文時代の仙南地方でも有数の大規模な集落跡であることが明らかとなってきました。こうした成果をいち早く住民の皆さんや研究者に公開するため、日々の調査の様子をインターネットで紹介したり、中間報告として報道発表と見学会を開催しました。その後、調査の記録類や出土品の整理作業に着手しましたが、対象となる記録類や出土品の量が膨大かつ内容も極めて多岐に及ぶことから、相応の時間を要することが想定されました。このため教育委員会では、谷地遺跡の発掘調査成果が仙南地方における縄文時代の人々の暮らしや社会を知る上で極めて重要なものと位置づけ、その公開・活用を行なうことを念頭に、今回の記録保存事業にかかる整理作業の年次計画を策定して作業にあたってきました。

整理作業では出土品の洗浄から復元、計測や図化といった膨大な作業と並行して各種の理化学的な分析調査も行ない、新たな事実も次々と明らかになりました。記録保存事業の総まとめとなる発掘調査報告書の作成にあたっては、多くの研究者の方々や関係機関からの指導と協力を得ました。この間、新たな開発事業に伴う発掘調査など埋蔵文化財の現場対応や各種文化財の保護保存対策、普及啓発活動などと並行して進めてきたことにより、整理作業と報告書作成には通算9年もの歳月を要し、発掘調査の着手から10年を経てようやく記録保存事業の完了を見ることになりました。各位の文化財保護への理解と協力の下、たくさんの方々の手によって谷地遺跡の記録を残すことができたのです。



発掘調査の整理作業（土器の接合作業）

### 3. 谷地遺跡から見てきた縄文時代の蔵王東麓での暮らしぶり

**縄文文化のなかの谷地遺跡** ここに出版された『谷地遺跡発掘調査報告書』を開けば、発見された遺構や出土した遺物の豊富さと多彩さに多くの人が驚くことでしょう。複雑でデザイン性に富んだ縄文土器の文様や土偶の造形美、石器の精緻な加工技術に衝撃を受ける人もいかもしれません。日本列島の縄文文化を担った人々の多くは、こうした技術力やデザインセンスを持ち合わせていました。それと同時に縄文文化は、各地の環境に適應した地域性豊かな生活文化とそこから派生する精神文化の集合体です。そうした地域性は、集落を構成した住居跡の構造や配置、各種の道具の種類や製作技法、形や文様のデザインの違いとして表れています。

**谷地遺跡と松川流域の居住史** 谷地遺跡に集落が営まれたのは縄文時代中期の初め、今から約5,400年前に近い頃と考えられます。蔵王連峰東麓の松川沿いの低い台地の上で、水場に面した広い場所が選ばれました。調

査区内には住居や建物、貯蔵穴などの遺構が弧状に分布していたことから、本報告書では集落内の施設配置や活動は広場を中心として行なわれ、北側に隣接する寺門前遺跡<sup>てらもんまえ</sup>を含む調査区外の広範囲に展開する環状の遺構配置が形成されたと推定しています。このような集落は環状集落と呼ばれており、中央の広場は共同作業や集落の行事・まつりの場として利用されたようです。ただし今回の調査区は谷地・寺門前遺跡のごく一部に過ぎないので、集落が何軒くらい<sup>さやどつやま</sup>の住居で構成され、どの程度の人口を擁したのかは不明です。遺跡の全体像の解明は将来の調査を待つことになります。

ともあれ、谷地遺跡の集落は縄文時代中期の半ばに差し掛かる頃、約 5,000 年前頃には終焉を迎えたようです。その後を引き継ぐように、北側の一段高い台地<sup>さやどつやま</sup>の上にある鞘堂山遺跡では新たに集落が営まれます。そして鞘堂山遺跡の集落が終焉を迎える頃、さらに一段高い台地<sup>ゆざかやま</sup>の上にある湯坂山 B 遺跡に集落が営まれました。このように、松川沿いの約 1.5km 圏内の狭い範囲の中に残された時期と立地の異なる遺跡群は、居住環境の変化など何らかの理由で集落を移転させながらも、松川沿いの地域を活動の場として暮らし続けた人々による縄文時代中期の約 900 年間にわたる居住史として復元できる可能性を秘めています。

**谷地縄文ムラの食生活** 谷地遺跡の集落では、竪穴住居や掘立柱建物の周囲にたくさんの貯蔵穴が作られました。三角フラスコのような形をした竪穴で、人の背丈よりも深い大型のものも見られます。トチの実やドングリなどの堅果類<sup>けんか</sup>の貯蔵施設と考えられており、当時の食生活の中で栄養価が高く貯蔵も可能な堅果類が重視されていたことが分かります。集落内から出土した炭化種実を調査したところクリ、オニグルミ、トチの実などが同定され、分析者は食料資源としてクリが主に利用されていたと判断しています。また、焼けた動物の骨も多く出土しています。調査したところほとんどがイノシシとニホンジカと同定され、特にニホンジカが多いことが分かりました。もちろん調理法や動物種ごとの骨の残りやすさなども考慮する必要がありますが、狩猟対象の中心はこうした中型哺乳動物であったと考えられます。当時の気候は現代よりも温暖で、海岸線は現在



集落での暮らしぶりを示すさまざまな出土品



松川流域の台地（河岸段丘）と縄文時代の遺跡群

よりも7～8km内陸にありました。さらに内陸の柴田町槻木盆地<sup>つきのき せきこ ひがた</sup>周辺は潟湖ないしは干潟のような環境にあり、豊かな海産資源を利用した人々によって貝塚群が残されました。谷地遺跡の集落と槻木盆地の貝塚群との距離は約10kmと近く、こうした海産物を入手していた可能性も十分に考えられます。

**谷地縄文ムラとクリ** 竪穴住居跡のうち1軒では床面に多量の炭化材が散乱し、火災に遭ったと考えられました。炭化材は住居の柱や屋根の構築材であったものと考えられ、これらの樹種を調べたところ、すべてがクリ材と同定されました。住居などの建築材としてクリ材を好んで用いていたことが分かります。クリは重要な食料でもあったので、自然状態では難しい食用と木材利用を両立させるエコシステムが存在したはずで、遺跡の土壌を分析したところ、クリの花粉が検出されました。分析者の研究によればクリ花粉の飛散範囲はごく狭く、花粉の検出は付近にクリの木が生育していたことを示すということです。東松島市里浜貝塚や青森県三内丸山遺跡では縄文時代前期には集落の周囲に人工的なクリ林を形成していたことが分かっています。谷地遺跡においても、集落の周囲にクリを育成して計画的に管理していた可能性が高いと考えられます。

**谷地縄文ムラのもづくり** 縄文時代の人々の暮らしを支えた重要な道具のひとつに石器があります。谷地遺跡の集落では、石器の製品のうち約半数に珪質頁岩<sup>けいしつせつがん</sup>という非常に良質の石材が、残りの約半数にはガラス質流紋岩<sup>りゅうもんがん</sup>など多種類の石材が使われていました。珪質頁岩は宮城県側でも見られますが、良質な石材のまとまった産地は山形県側にあります。谷地遺跡の集落へは、ある程度の大きさに割り取った素材<sup>いしやり いしべら</sup>か、石槍や石鏃、打製石斧などの製品として持ち込まれたようです。集落の周辺の河川で採取できるガラス質流紋岩などの多様な石材は、主に石鏃<sup>せきぞく</sup>など小型の石器づくりに使われました。日常の生活圏を越えた遠くの石材を安定して入手する一方、地元の石材もうまく利用しながら石器づくりを行っていたことが分かります。

谷地遺跡の集落では縄文土器や土偶の製作が活発に行なわれ、焼成中に破裂や変形を起こした失敗品も多く残されました。この中には、表面に細かい発泡が見られたり溶けたように変形したものもあります。土器の材料を分析したところ、粘土の中にガラスを主成分とする火山灰を混ぜていたことが分かりました。本報告書を執筆した調査員は、焼成状態の良好なものは緻密で硬い土器になっていることから、粘土に火山灰を混ぜる行為はガラス質の熱変化によって焼き締め<sup>やきしめ</sup>の効果を高めるため、焼成中に温度が上がりすぎたりするとガラスが溶け出して発泡したり変形することがあったのではないかと考えています。良質な土器を生産するために、あえて難しい技術にも挑戦した谷地遺跡の集落の人々の研究熱心な姿が浮かび上がりました。

縄文時代の土偶は複数出土すること自体が稀ですが、規模の大きな集落ではまとまった数が出土する傾向があります。谷地遺跡では138点が出土し、集落で盛んに土偶づくりを行っていたと考えられます。山形県米沢市の台ノ上遺跡では約270点、舟形町の西ノ前遺跡では国宝「縄文の女神」を含む48点が出土していますが、発掘した面積を考慮すると谷地遺跡の出土数は突出しています。土偶を用いたまつりを行なうだけでなく、ここで作られた土偶は周辺の集落へも分配されたのかもしれませんが。



堅果類などを保存したと考えられる大型の貯蔵穴



集落内で製作され大量に出土した大小の土偶

#### 4. 谷地遺跡をとりまく地域間交流の広がり

**蔵王山麓の東西交流と地域文化圏** さて、出土した炭化物の理化学的な年代測定の結果によれば、谷地遺跡の集落における人々の活動は約400年間という時間幅の中で展開されました。多量に出土した縄文土器の中には全体が復元できたものも多く、これらの形や文様のデザインと、それを表現した技法の変化を連続的に辿ることができました。谷地遺跡で作られた縄文土器のデザインは「大木式土器」というタイプで、東北地方南部とその周辺に分布することが分かっています。その中でも谷地遺跡を含む宮城県南部から福島県北部、そして山形県内陸部にかけては大木式土器分布圏の中心となった地域で、詳しく調べていくと大木式土器の成り立ちやその移り変わり、そしてそれをういた人びとを介した地域間のつながりの様子が分かります。

谷地遺跡の縄文土器は特に宮城県南部から福島県北部にかけての地域で共通性が高く、仙台湾沿岸の気候や植生の似通った地域にひとつの文化的なまとまりがあったことが分かります。ところが、土偶や石棒などのまつり道具を見てみると、福島県北部の地域ではやや異なった様相を示し、宮城県南部から山形県内陸南部の蔵王山麓を中心とする地域に極めて強い共通性を示すことが分かりました。この地域でしか見られないY字形をした独特のデザインの土製品も分布し、精神的な営みを共有する強い文化的なまとまりがあったことを示しています。それにしても、奥羽脊梁山脈に連なる蔵王連峰に隔てられ、季節的な気候や植生も異なるこれらの地域に、どうして共通性の高い文化が根付いたのでしょうか。



蔵王山麓の地域文化圏を示すまつりの道具

縄文時代の蔵王東麓と西麓のつながりを示すものとして、石器づくりに用いられた良質の珪質頁岩や黒曜石といった石器石材の物流の様子も明らかになっています。谷地遺跡の調査成果を分析して本報告書を執筆した調査員は、降雪量などの気候や植生に加えて石器石材や海産物といった資源分布の異なる蔵王連峰の東麓・西麓地域の人々が相互補完的に連帯を強め、東西の物流・交流を活性化させていたのではないかと考えました。環境が異なるからこそ、互いに協力し支え合う文化が生まれたとする仮説です。東西の物流の最たるものが西から東へ運ばれた石器石材の珪質頁岩であったと考えられます。沿岸部に貝塚群を擁する東から西へ運ばれたのは、あるいは海産物やその加工品であったかもしれません。今回の調査では海産物の利用や流通の実態を示すような痕跡は見つかっていませんが、今後も継続的に検討していく必要があります。蔵王山麓には、このような「ヒト」を介した集落間の強いつながりによって「モノ」（石材、製品、産物など）と「情報」（製作技法、暮らしの知恵、信仰やまつりの作法など）を共有する「地域文化圏」があったと考えられるのです。

**集落間ネットワークによる広域交流** 谷地遺跡の集落にもたらされた「モノ」の中には、蔵王山麓の地域文化圏を大きく越えて遠方からもたらされた製品もありました。北陸産のヒスイ製垂飾品（ペンダント）、蛇紋岩・透閃石岩製磨製石斧、北海道産のアオトラ石製磨製石斧がそれです。ヒスイは透明感のある良質なもので、魔除けとして身に付けたりまつりの道具として使われたようです。アオトラ石や蛇紋岩・透閃石岩は衝撃に対して強い耐久性を示し、石斧のような激しい使い方をする道具には最適の石材です。地元では入手できない貴重な石材で作られた石斧ですが、破損品も多いことからあくまで実用品として使い込まれたようです。

また、東北地方南部に分布する大木式土器とは異なるタイプの土器も出土しています。これらの土器の材料を分析したところ、地元の材料を使用していないものがあることが分かりました。描かれる文様やその技法が関東あるいは北陸地方で作られたタイプの土器と非常によく似ているので、これらの各方面の集落から運ばれてきた可能性があります。地元の材料を使用した土器の一部にも似た文様を描くものがありますが、それらは

概して文様や技法の再現が不完全なものが目立ちます。持ち込まれた土器の見た目を模倣して作られた土器と思われ、集落の人々が他地域の文化にも興味を持ち取り入れようとしていたことが分かります。

谷地遺跡の集落と北海道のアオトラ石の産地とは直線距離で約 500km、北陸の蛇紋岩・透閃石岩・ヒスイの産地とは約 300km に及びます。とても谷地遺跡の集落の人々が石材を求めて往復を繰り返しながら直接採取していたとは考えられない距離です。また、関東・北陸地方に由来する縄文土器の模



関東方面の集落との交流を示す土器

倣の様子から、土器作りや文様を描く技法までは伝わっていないことが分かります。これは、谷地遺跡の集落の人々が得ていた「情報」が持ち込まれた土器に描かれた文様という「モノ」を介したものに限られ、関東・北陸地方の「ヒト」との直接的な交流がなかったことを示しています。谷地遺跡の集落の人々は、行ったこともない集落の会ったこともない人々の作った「モノ」をどうして手に入れることができたのでしょうか。

こうした遠来の「交易品」は、各地域の中で中核となるような、規模の大きな集落で多く見られることが分かっています。このことと、先に述べた「モノ」を主体とする交流の実情を考え合わせると、谷地遺跡の集落に残された遠来の「交易品」は、地域の拠点となる集落間のネットワークを通じた「バケツリレー方式」でもたらされた可能性が高いと言えます。蔵王山麓の地域文化圏の結束を強めるとともに、近隣の地域文化圏と活発に交流することで、東日本の広範な地域を交易圏とすることができたのでしょうか。

## 5. 谷地遺跡の重要性

**蔵王東麓の大規模拠点集落** 縄文時代中期前半の谷地遺跡の周辺では、東方の沿岸部に柴田町槻木盆地の貝塚群、北方の川崎盆地に川崎町中ノ内 A 遺跡、南西の山地に七ヶ宿町小梁川遺跡の集落などが見つかっています。さらに北東の仙台市川添東遺跡や仙台平野に面した仙台市上野遺跡、南東の角田盆地の角田市鱸沼遺跡のほか、南方の白石市白石盆地にも集落の存在が予想されます。このように当時の宮城県南部・蔵王東麓では山地から沿岸部にかけて 10km 前後の間隔で集落遺跡が点在し、谷地遺跡は地理的にこれらの中間的な位置に立地していることが分かります。谷地遺跡の全体像の解明は将来に託されますが、今回の調査で確認した遺構や遺物の様相から比較的大規模な集落跡であることは確実と考えられます。縄文土器のほか土偶を中心としたまつりの道具を多量に製作するなど生産活動が活発で、祈りやまつりなどの精神的な営みも盛んでした。さらに蔵王山麓の地域文化圏あるいはより広範な東南北部の大木式土器分布圏の内外の地域間交流の拠点としての機能も持っていたことから、本報告書では谷地遺跡が縄文時代中期前半の蔵王東麓において中核的な役割を果たした大規模拠点集落跡であると結論付けました。

**谷地遺跡と縄文中期社会** 今回の発掘調査は谷地・寺門前遺跡全体のごく一部を対象としたものですが、ここで営まれた集落の様子とその移り変わりの一端をうかがい知ることができ、広域的な地域間交流の実態も明らかになりました。本報告書にまとめられた谷地遺跡の発掘調査成果は、蔵王東麓における縄文時代中期の人びとの具体的な暮らしぶりや当時の地域社会の実態を示すとともに、東北地方南部における縄文時代中期社会の成り立ちとその様相を考える上で極めて重要な手掛かりとなるものです。

谷地・寺門前遺跡ではこれまで目立った開発行為がなく、遺跡の保存状態は全般に良好とみられます。今後は、今回の調査成果の公開・活用を通して地域学習や研究活動を推進しながら、将来の調査でさらに多様な情報を提供してくれる可能性を秘めた遺跡として、地域住民の皆さんとともに保存に努めていくことが必要です。